



やがて、買い物に行っていた3人も到着。浴衣姿の女子が5人も揃えば、なかなか華やかになる。体型的に、沙依、サム、そして美月は浴衣向きだ。ケイも悪くない。マリナは、ちよつとキツそうだが、それはそれで色っぽいのである。ただ眺めていられれば幸せなのだが、そうは問屋が卸さないわけで、男どもは、それなりの対価を支払わなければならない。

「そろそろ行くわよ。お父さんは、こっちの重いのをお願いね。沙依はこれを持って行ってくれる？」

「はい。了解です」

親父は、既にビール片手にご機嫌だ。

「あなた、飲むのは後にしてちょうだい。だいたい、お客さんがいるのに行儀が悪いつたら」

お袋に、そう言われて、親父は手にしたビールを飲み干すと、しぶしぶ大きなクーラーボックスを持って、表に出て行った。

「あ、私たちも持ちましようか？」

「悪いわね、マリナちゃん。それじゃ、こつちをお願いできるかしら」

「私も何か持つわ。ほら、ケイも何か持ちなさいよね」

「じゃ、私は沙依ちゃんのを半分持つよ。おお、なんだか美味しそうなおいがするな」

「つまみ食いしたら承知しないわよ」

「あはは、バレた？ 残念。ご馳走はお預けか」

「あんたねえ」

いつも通りの美月とケイである。それぞれ荷物を持って表へ出ると、家の前に車が到着している。とりあえず、荷物を積み込んで、出発。

「場所はいつもの所でしょ」

沙依が言う。

「そうよ。旧浅草の川沿いで、ケンジたちが場所取りしてるはずだから」

「お兄ちゃんたち、大丈夫かな。場所なかったらどうしよう」

「さっき、場所が取れたって連絡があったから大丈夫よ」

「そっか、それなら安心だね」

俺は家族に信用がないのだろうか。なんとなく悲しくなる会話である。さておき、全員予定通り合流。川沿いの公園に陣取って、料理を広げる。

「すごい。ご馳走ですね」

「どうぞ、遠慮なく召し上がれ。飲み物は、各自好きなを取ってね」

「ありがとうございます。美味しそう・・・」

「マリナったら、食べ過ぎるとキツイよ」

ケイが、意地悪そうに言う。

「あんたも人のこと言えないんじゃないの？」

と、すかさず美月。その脇で、親父は早速ビールをあけている。あたりはそろそろ薄暗くなり始めて、川の土手の街灯が、うっすらと輝き始めている。見上げれば、スカイツリーが、薄い青色にライトアップされている。これは、花火の夜の特別なイベント。この歴史的な建造物が作られた当初のライトアップを再現したものらしい。

「だいぶ暗くなってきたね。そろそろかな」

「口に食べ物を入れて喋らないでよ。行儀悪いわね」

ケイと美月がそんな会話をしている脇で、少し離れた川の土手から、白い光が尾を引いて空に上がっていった。少し遅れて、ドンという音が響いてくる。

「あ、始まったよ」

沙依の声に重なって、光は空ではじけて白い雲となり、パンパンという乾いた音が響く。これが開始の合図なのだろう。それからしばらくして、幾筋もの光の筋が空に上って、色とりどりの大輪の花を咲かせた。

「すごい。綺麗ですね」

「やっぱ、本物は迫力が違うね」

マリナに相づちをうちながらも、ケイは箸を休めない。親父はその脇で二本目のビールを、プシュッとやっている。

「今年は賑やかで楽しいね」

気がつくとも沙依が隣にいて、俺を見ながらそう言う。去年の夏は帰れなかったからな。こいつも寂しかったのかもしれない。

「ああ、そうだな」

「毎年こんなだといいいのにな」

沙依はそう言うのと、俺に軽くもたれかかる。

「あ、ケンジを沙依ちゃんに取られちゃったよ。どうする美月？」

「あんたね。兄妹きょうだいなんだから、おかしなおかしなこと言うんじゃないわよ」

「いやあ、わかんないよ。ケンジもシスコンみたいだしさ」

おいおい、それはどういう意味だ。こいつがブラコンだけで、俺はシスコンなんかじゃ…

「えへへ、今夜のお兄おにいちゃんちゃんは沙依のものだし」

「おい、誤解されるようなことを言うな。暑苦しいから離れろ！」

「お兄ちゃん、テレてる」

「うるせー」

こういう沙依もちょっと珍しい。こんなに大勢で花火見物なんて初めてだから、ちょっと浮かれているのだろう。なんとなく甘酸っぱい感覚だが、俺は女子たちの目も気になる。さすがにシスコン扱いされると、これから先、リーダーとしての立場がキツくなりそうだ。俺は、沙依の頭を押しのと、お茶に手を伸ばして、ひと口飲んだ。



そうこうしている間に花火も佳境となり、これでもかと言うくらいの早打ちが始まった。色とりどりの光と、腹に響く音に圧倒されて、言葉を失ってしまう。

「あれは、何でしょう」

マリナが指さす方向、花火の向こう側に、うつすらとオレンジ色の光が浮き上がってくる。やがて、その光は、大きなタワーの姿になった。

「東京タワーね。あれはホログラムよ。パリじゃエッフェル塔が本物で、花火はホログラムだけど、こっちは逆ね。花火はやっぱ、こっちのほうがいいわ」

美月が解説している。これも花火の夜限定のイベントである。300年前、老朽化のために取り壊された東京タワーだが、今はホログラムとしてその姿が保存されているのである。東京タワー記念館に行くと、その内部も仮想現実として体験できる。展望台では、一部の床がガラス張りになっていて、真下を見ることができたようだ。高所恐怖症の人間にはちよっときつい仕掛けだったかもしれない。そんなことを考えている間に、花火は最高潮。早打ちに加えて、川沿いの仕掛け花火に点火されると、あたりは一気に明るくなる。これは「ナイヤガラ」と言うらしい。北アメリカの北部にある大きな滝の名前なのだそうだ。

「すごい。綺麗ですね」

「いやあ、圧倒されるよね。実は、この花火を生で見るのは私も初めてだし」

マリナとケイも、はしゃいでいる。美月は、音と光に圧倒されたみたいな感じで、黙って花火を眺めている。それとも何かを考えているのか……。

「お兄ちゃん、やっぱり気になるんだ……」

いきなり、沙依が耳元でささやく。

「別に俺は……」

「ごまかさなくてもいいよ。もうバレバレだし。お兄ちゃん、わかりやすいんだから」

「あのなあ、俺はただ、昨日のことが気になって……」

「そうそう、その話なんだけど、後でサムさんとお話ししたほうがいいよ。夕べ、色々と調

べてもらって、何かわかったみたいだし」

「そうなのか。実はジョージと親父も、昨日徹夜で調べてたんだけど、俺には何が何だかさっぱりだ」

「じゃ、今夜は、このあと謎解きだね。沙依も無関係じゃなさそうだし」

「無関係じゃないって、どういうことだ」

「三角関係・・・かな」

「おい」

沙依は無邪気に笑う。

「少なくとも、このD Iユニットが、からんでいることは間違いないみたいだし、これを持ってるのは3人。沙依とお兄ちゃんと美月さんってことだよな」

「でも、それだけじゃないんだよな。本来、働くはずのない回路が働いているらしいし」

「あ、それ、サムさんも言ってたよ。本来、接続されるはずのない回路に信号が流れてるって」

「そうか、サムもそこまで気がついたのか。これは、ジョージや親父も入れて話をしないといけないな」

「それがいいよ。でも・・・」

沙依はまた俺にもたれかかって、こう言った。

「今は花火を見ようよ。次はいつ一緒に見られるか、わからないし」

「そうだな」

俺たちは、また、しばらくの間、時間を忘れて、圧倒的な音と光に身を任せたのである。



「これじゃないか？かなり大量のデータが学生専用回線に流れてるぞ」

「確かに。こいつの出元はどこだ？」

アカデミーの一室では、デイブとフランクが、仮想パネルを眺めながら、通信ログと格闘していた。数時間前に、地球にいるジョージ・エイブラムスから連絡があつて、正体不明の通信がアカデミーから中井ケンジのD Iに流れているので調べて欲しいという依頼を受けたのである。

「ちょっと待ってくれ。多重化システムを通る前の中継機のログを見てみよう」

フランクはそう言うと、仮想パネルを操作した。

「よし、これだ。発信元は・・・センターコンピュータの統合通信ユニットだな」

「どういうことだ。センターコンピュータが直接、学生にデータを送ったというのか？」

「確かに普通では考えられない。機能としては可能だが、特定の学科の試験を除いて、センターコンピュータが直接データを学生に送るようなプログラムは組み込まれていないはずだ。誰かがセンターコンピュータに指示を与えない限りはな」

「つまり、誰かが意図的にやったということか。アカデミーの内部者か、それとも外部のハッカーがやったと言うことか」

「その二者択一なら、内部者のほうだな。少なくとも、センターコンピュータをハッキングできるスキルの持ち主は、アカデミーの歴史上、二人しか知らない」

「ジョージ・エイブラムスカ」

「ああ、それとお前さんだ」

「俺が？冗談はよせ」

「いや、お前なら可能だろう。もちろん、お前がやったとは言っていない。エイブラムスについても同じだ。そもそも二人とも、そうする理由がないだろう。まあ、誰がやったとしても、その理由は不明だが」

「しかし、いったい誰が、そんなことを？」

「わからない。でも、調べる手はあると思う」

「センターコンピュータ自身に聞いてみるのか？」

ダイブがちょっと茶化した感じで言う。

「いや、それが一番いい手だよ。こいつほどじゃないが、痩せても枯れても、太陽系最大のコンピュータシステムのひとつなんだ。原因を自分で探し出すくらいのは、朝飯前だろう」

「なるほどな。システム診断プロセスと同じアルゴリズムを使えばいいのか。たしかに、センターコンピュータは許可さえあれば、L2の全システムにアクセスできるからな。どんな経路からのアクセスでも見つけ出せるな」

「それじゃ、早速やってみよう」

そう言うときフラंकはパネルに向かってしばらく指示を入力する。やがて、二人の正面に大きな表示パネルが開いた。これは、意識下の仮想パネルではなく、プログラムによる投影である。パネルには、地球圏のネットワークが模式化され、3D表示されている。中心にあるのがL2ステーションのネットワークである。しばらくすると、経路のいくつかの色が変わる。

「出たみたいだな。拡大してみよう」

フラंकが操作すると、L2のネットワーク部分が拡大され、細部の経路が浮き上がってきた。その中心にあるのがアカデミーのネットワークだ。そこに対して二つの通信経路がハイライトされている。一本はL2内部、もう一本は地球のネットワークへの経路のようだ。

「L2内部に通信の発信元がありそうだな。これをトレースしてみよう」

フラंकがそういった直後に、さらに表示が拡大される。

「宇宙港か。どこかの船が発信元のようにだな」

「ちよつと嫌な予感がするぞ。もしかして、これはうちの船じゃないのか」

「そのようだな。やはり犯人はお前だったか」

「悪い冗談はよせ。しかしうちの船とはな。ここから先は俺の仕事だな」

ダイブはそう言うと、コミュニケーターを操作して、しばらく何かをしていた。

「こりや驚いた。すまんが、アカデミー側の内部経路を出してくれないか」

「何かわかったようだな。ちよつと待てよ」

フランクがそう言うと、パネルの表示がさらに拡大される。

「やっぱりか。犯人はこの兄弟だな。最終的な通信指示は、このコンピュータから出ているみたいだ。それに、うちの船の兄貴分が一枚かんでいるらしい」

「どういうことだ」

「それは俺にもわからん。本人に聞いてみるのが一番よさそうだが」

ダイブはそう言うと、脇にパネルをもう一枚開いた。それをのぞき込んだダイブはちよつと戸惑った様子である。

「そうか、うっかりしていたよ。クロン化の副作用が気になったんで、前もって、周囲とのコミュニケーションを一部制限していたんだが、それを解除し忘れていた。これじゃ、何か言いたくても伝える手段がないな。ちよつと解除してみるぞ」

ダイブがパネルを操作すると、いきなりパネルが大きくなり、太陽系周辺の立体星図に重ねて大量の情報が一気にあふれ出した。

「おいおい、そんな一気に出来ても何が何だかわからんぞ。うっかりしていた俺が悪かった。たのむから順に説明してくれ」

ダイブがそう言うと、パネル上の情報が整理され、説明用の小さなパネルが開く。そこに説明が表示されると同時に星図の一部がハイライトされ、拡大する。そこには、薄暗い星の姿が映し出されていた。

「これは褐色矮星だな。これを見つけたって言うのか。それで？」

拡大図が消え、次に、星図上に褐色矮星の軌道が表示された。その軌道は太陽系の中心部を横切って、火星と地球の軌道の中間を通過している。

「おいおい、これは本当なのか。こんなものが太陽系を横切ったら大惨事だぞ」

フランクが驚いた顔で言う。

「こいつの速度と予想される影響を計算してくれ」



ドイツが言うと、しばらくしてメッセージが表示される。

「フランク、影響を詳細に計算するためにセンターコンピュータの協力がほしいそうだ。頼めるか。流星に勝手に使うのは心苦しいのだと」

「わかった、やってみよう」

フランクがセンターコンピュータに指示を与えると、シミュレーションが始まった。星図が一気に細かくなり、あらゆる小惑星や太陽系内の物体がその上に表示される。褐色矮星の動きが加速され、それに伴って、周辺への影響が表示されていった。

「まずはオールトの雲だな。大きく攪乱されるようだから、数千年、数万年の単位で太陽系内に落ちてくる彗星の数が激増しそうだ。惑星への衝突も起きる危険がある。カイパーベルトへの影響は軌道の傾きから見て軽微なようだが、小惑星帯は、だいぶ影響を受けそうだ。軌道を外れる小惑星がかなり多い。それに、惑星軌道面を通過する際の火星の位置が最悪だ。火星の軌道が大きく傾きそうだが・・・」

「通過後の太陽系はどうなる？」

「それが問題だ。特に火星は惑星軌道面から大きく傾いた楕円軌道になりそうだ。この軌道だといずれ地球とも干渉しそうだから、最終的に地球も今の場所にはいられないだろうな」

「おいおい、さらっと言ってくるが、こりゃ恐竜絶滅級の大惨事じゃないか」

「そういうことだ。問題は時間軸だが・・・」

「今のシミュレーションは実時間だとどのくらいの期間にあたるんだ？」

「ちよつと待てよ・・・、おいおい、冗談じゃないぞ。現在の位置から太陽系を横切るまでに10年しかないのか？しかも、オールトの雲を横切ってからほんの3年ほどで太陽系を抜けてしまふとはな」

「高速のはぐれ星だな。こいつはどっちの方向から飛んで来たんだ」

「どうやら起源は銀河系の中心方向らしい。おそらく、遙か昔に中心の巨大ブラックホールにはじき飛ばされた星だろう。そうでなければ、この速度の説明がつかない」

「そうだな。俺もそう思う。しかし、これは一刻を争うぞ。すぐに対処を考えないと手遅れになる」

「ああ、アカデミーから緊急警報を出して惑星評議会を招集してもらう必要があるな。しかし、こんな物に対処できるのか？」

「かなり難しいだろうな。そもそも木星よりデカイ星の軌道を変えるパワーなんか、俺たちは持ち合わせていないからな。ひとつ考えられるとしたら、重力遮蔽だろう。この星と太陽や

周辺の恒星との間で働く重力を遮蔽することで、軌道を変化させられるはずだ。問題は、どの程度変化させられるかだな。少なくとも惑星系からは遠ざけたいところだが、もっと精密な情報がないと判断ができないな」

「一度、近くに行つて詳細な調査をする必要があるな」

「そういうことだ。もたもたしている時間は無いぞ」

「よし、すぐに動こう。こいつには引き続き情報収集をさせておこう」

そう言うと二人は早足で部屋を出て行った。